結草
kusamusubi
No.43

Publishing house:2-19-32 Moriyama Kanazawa Ishikawa 920-0843JAPAN Shinshu Otani-ha Ryukouzan Jhokoji Phone:076-252-4922 https:// jhokoji.net info@jhokoji.net 2025.4.1

# お念仏を申しましょう

道因寺住職　相馬　豊

ただいまご紹介頂きました、白山市で道因寺の住職をしております相馬豊と申します。昨年の浄光寺さんの報恩講からここまで数えますと３６５日、一年という月日が流れていきました。その間、皆さんどういう風に一日一日を送られたでしょうか。その私達の一日一日の在り様を本願寺八代蓮如上人がご自分のことを踏まえながら、『御文』の第四帖四通目冒頭で「秋もさり春もさりて、年月をおくること、昨日もすぎ今日もすぐ。いつのまにか年老のつもらんともおぼえず、しらざりき」と。これを現代語的に訳して申しますと、去年の春も過ぎ、秋も過ぎて、今年の春も過ぎていきました。時間の流れは過ぎ、昨日という一日ももうすでに過ぎてしまいました。そして今日は十月十七日、今午後の二時三十分を回っております。今日という日も過ぎて行きます。その間、一体何をしたのか。どういう人と会い、どういう言葉を交わし、どういうことを聞いてきたのかは一つも覚えておりません。また何を言ったのかも知りません。ただその間、老いの白髪となる身と成り果てております、こういう風に蓮如上人がご自分のことを振り返りながら御文にしたしめた訳ですけれど、その御文の言葉を頂き直しますと、これは私自身のことだ、自分のことを言い当てられているなと。

私達も今日という一日を誰もが一生懸命に生きていることには間違いありません。色んなことに出会い、色んなことに振り回されながらも今日という一日を過ごしてきたことには間違いありません。しかし、よくよくその一日というものを頂き直しますと、一体何をしてきたのかな。どうでしょう、皆さん振り返ってみてこの３６５日、一日一日を何とかやり過ごしながら今日まで生き続けてきていると思うのですが、改めて今日まで私達は何を願い生きているのでしょうか。今私達に問いかけられていることは何なのかな、ということもあります。

現代という時代、一つ言えるのは自我が非常に強くなってきたと思います。自我、それは損か得か、良いか悪いか、善か悪か。エゴというものがどんどんどんどん膨れてきてしまって、それに基づく社会では今一番何を大事なこととして考えているかというと、これは現在の政治を見ても分かるように、「経済」です。「経済至上主義」、これが今私達の時代を覆い尽くしているといってもいいと思います。この経済至上主義に基づいて自我がどんどん膨れ上がって、いつの間にか私達も損か得か、良いか悪いか、そこに身を置くということになります。

特に今年は十代、二十代の若者が白昼堂々と、貴金属店に強盗に入るという事件が度重なって起こりました。最初は、

銀座の高級腕時計店を襲撃した時も、通行していた人は映画の撮影かと思ったといいます。その後、横浜や北海道、そして全国でも若者が白昼に強盗に押し入るという事件が起きました。その根本には闇バイト。闇バイトをしなければならないということはどういうことでしょうか。十代、二十代の方々も倫理、道徳的に強盗に入ってはいけないということは知っているのです。それは重々知っているのです。悪いことだということは知っているのです。でも悪いことだと知っていてもそれをしなければならない。その根本にあるのは何でしょうか。悪だと知っていてもそれをしなければならないというのです。そこから見えてくるのは、生き辛らさです。生きることが辛いということ。

私も皆さんも生きることに四苦八苦しているのが現状ではないでしょうか。生き辛い世の中になった。先月でしたか、経済産業省が、正規の社員として働いている三十代、四十代の女性の１６％の方が離職をしているというような報告がありました。その離職する一番の原因は何かというと、同じ職場にいる人と人との関わりが嫌だと。つまり人間関係の悩みから定職についていても仕事を辞めなければならなくなる。人と人との関わりということです。

私達は「人間」という漢字を「にんげん」と読んでおりますけれど、こう読まれる方もいます。「じんかん」。人と人との間柄。人と人との関わり、間柄を生きている。私達も人と人との関わりの中で今日まで大きく成長してきました。決して一人で生きてきたわけではありません。それぞれに色んな方と出会い、その縁によって色んな事を学び、教えられて成長してきた。つまり人間とは、人と人との間柄の中を生きている存在です。しかし、その間柄に生きていると私達にはどうしても好き、嫌い、というものが出てくる。そして嫌いとなれば、その方の人格まで嫌いになるのですね。これが一番恐ろしいことではないでしょうか。人格までが嫌われていく。だからこそ今改めて私達に問いかけられているのは宗祖親鸞聖人のお言葉、そのお言葉を聞き、歩んでいくということが私たちに一番求められている道ではないでしょうか。

今日、浄光寺さんの報恩講が執り行われてます。この本堂で宗祖親鸞聖人のお作りになられた『正信偈』真四句目下、そして御和讃も勤修されました。今年は宗祖親鸞聖人御誕生八五〇年。金沢教区ですと新型コロナウイルスの影響もあって宗祖親鸞聖人の七五〇回忌御遠忌がようやく今年勤まりました。宗祖親鸞聖人のご誕生とその生涯を見聞きする機会に偶然にも立ち会ったということです。宗祖親鸞聖人のお言葉というのは決して過去のお言葉ではなくて、今、現に生きている私達が聞かなければならない言葉でもあり、未来の方々にも聞いて頂かなければならない言葉であるといえます。だから言葉というものは非常に大事な意味を持ちます。

しかし一方で言葉というものは恐ろしい面も持っています。それは人を傷つけてしまう言葉です。何気ない言葉で傷つけてしまうことがあります。何気ない悪意と気付かない言葉を私達は日常会話で使っているということです。一方で人を温かく優しく包み込む言葉も持っています。だから言葉というものは二面性を持っています。温かく温もりのある言葉であると同時に、一方では誹謗中傷、人を傷つける言葉にもなる。だから言葉というものは非常に難しいものですね。使い方一つによっては人を傷つけていくことになるし、温もりのあるものにもなる。だから言葉というものは大きな意味を持ちます。そしてその言葉遣いでついつい忘れてしまう

ことがあるからこそ先達は「お念仏を申して下さいね」と私達に語り掛けられました。

「お念仏を申しましょう」、これは親鸞聖人がよきひと法然上人からお聞きした言葉です。「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」（『歎異抄』第二章）

先程申しました蓮如上人も御文の中で繰り返し繰り返し「お念仏を申しましょう」と言われています。一番身近で聞き慣れているお言葉が『御文』五帖目第一通のお言葉、「末代無知の、在家止住の男女たらんともがらは」で始まって、この言葉で閉じられます。「ねてもさめても、いのちあらんかぎりは、称名念仏すべきものなり。あなかしこ、あなかしこ」。蓮如上人も私達に「お念仏を申しましょう」と繰り返し言われています。そして私達は生活の中で先達からも「お念仏を申しましょう」と聞いて今日まで育てられてきました。

しかしどうでしょう、なぜ「念仏を申しましょう」と言われているのか、この意味合いがなかなか分からないということがあります。十代二十代の方々とお話をする機会がある中でこう言われました。意味がはっきりしないことは致しません。意味が分かればそれは致します。自分の中で意味付けに納得すればそのことは行う。意味が分からないのにそれはできませんと。そうすると「お念仏を申しましょう」とこう言われた時、今の若者はどうするかというと、念仏ということの意味が分からないのに口で称えることは出来ません。意味が分かれば称えます。はっきりしていますね。

でも私達は先達から、意味が分かっても分からなくても「お念仏を申しましょう」、こういう風に言われ続けてきました。なぜ先達は私達に念仏というものをお勧めになられたのでしょうか。お念仏というものは「南無阿弥陀仏」という六語の漢字を、単語を発音するだけということではない。発声でもない。「お念仏を申しましょう」、これは「呼びかけ」だということです。呼びかけの言葉。そして呼びかけの声です。誰に呼びかけているのかというと、私一人（いちにん）に対して。私一人に「お念仏を申しましょう」と呼びかけている。

私も皆さんも家庭生活を営んでいます。家庭生活を営むということは家族の一人一人のお名前を呼び合うという関係の中で生きているということです。誰もいないところで連れ合いの方の名前を呼んだり、お子さんの名前を呼んでも誰も返事をしてくれません。名前を呼ぶ時は必ずその人に向かって名前を呼びます。何故名前を呼ぶのでしょうか。一つは何か頼みたいことがあるから、用事があるから呼ぶ。もう一つは日々の生活を見ていて何か不安や気がかりな事を目にした時、私達はお名前を呼びます。大丈夫ですかと言います。名前を呼ぶということは常に相手に対して呼ぶということです。相手がいないのに名前を呼ぶということはしないです。そうすると呼ばれているということは私一人の中に何か問題があるということです。問題があるから「お念仏を申しましょう」と呼びかけている。

毎月２８日に道因寺で御参り合いがあるのですが、先月のことです。そのお参り合いが終わって集まった人が自宅へ帰られていく。私は本堂の蝋燭の後始末をしようとすると、お一人の女性の方がご本尊の前で正座していました。気になりましたのでその女性に「何かお話でもあるのではないですか」と声を掛けました。そうするとその女性の方が「実は今年の七月、八月の二ヶ月の間に本当に親しかった友人が二人亡くなっていきました」と。そして十月、今

月です。実は明日、その方の誕生日です。六十歳になります。七月、八月に二ヶ月の間に大の親友が相次いで亡くなっていき、自分が還暦を迎えるにあたって、改めてあとどれ位生きていられるのだろうかと思ったといいます。不安と恐れが出て参りました。こう言われました。どうしたらいいのでしょうかと。

この方はお二人の死を縁として、今まで気づかなかったけれど、自分の中に自分ではどうすることもできない大きな問題があるということに初めて気づかされた。不安と恐れ。でもその方だけでしょうか。私達も実は今も不安と恐れを抱きながら、なんとか折り合いをつけてここにいるのではないでしょうか。正直なところ、不安と恐れでいっぱいの身なのではないでしょうか。

その方はどうしたらいいのでしょうかと、こうお尋ねになられましたけれど、これには私も答えられないです。こうすれば不安は無くなりますよ、こうすれば恐れは消えていきますよ、果たしてそういう事をできますでしょうか。私には不安や恐れを消し去る言葉は持ち合わせておりません。しかしこの不安と恐れということが一番大事な事柄ではないでしょうか。親しい友人の死は私一人の問題であったということです。もし二人の友人の死という縁が無ければ今も気づかないです。大切な人を亡くしてきた私達、そこで色んなことを感じたと思います。人は亡くなっていくということを知識としては知っているけれど、なかなかそれが自分に及ばないということがあります。

お葬式で荼毘に伏され、還骨勤行の御参りの後、五帖目十六通の「白骨の御文」の拝読があります。すると、読む方の私も、聞く方のご家族やご親族の方々も、亡くなった方に読まれている御文でないということはお気づきになっている。私に何か言われているのかなと。しかしその「白骨の御文」の中に、こういう言葉が出てきます。「我やさき、人やさき」と。しかし私達はついこう読み替えます。「人は先、我は後」こういう風に言葉を素直に受け止められない、ということがあります。

ちょっと余談になりますけれど、今年は金沢市の津幡町、山間部の方で集中豪雨、災害がありました。ところが私の住む松任では雨は一切降りませんでした。なぜ津幡だけなのか、ニュースで大変だったと話題になった時、松任の方々はこう言いました。「かわいそう」と。でもこのかわいそうという言葉には裏側の言葉があるのです。表面的にはかわいそうです。裏の言葉は何というかというと「私でなくてよかった」これが私達のこの「かわいそう」の中身でないでしょうか。かわいそうと言いつつも私の裏側にあるのは、私や私の家族でなくてよかった。

こういう私達の姿です。自分のことにならないと私達は他人事にしてしまう。死は知っているのです。でもそれが私事にならないという問題です。だから六十歳を迎える女性は友人二人の死にあわなければ今もそのことに気がつかない。しかし友人の死が縁となって初めて、自分

の中に自分ではどうすることもできない大きな問題があるということに気づかされた。自分ではどうすることもできないのです。消すこともできないし、消えることもない。この恐れや不安を消す方法はあるのでしょうか。これは無理ですね。消えないです。私達が持っているものはそんなに簡単なものではない。でも消すことが大事なことではなくて、その不安と恐れを抱きながら生きる姿勢というものが大事になってきます。不安と恐れを抱きながらどう生きて行くのか。生きる姿勢というものが逆に問われてくると思います。

私達は自分の中に自分ではどうすることも出来ない大きな問題を抱えています。それが私一人の問題。初めて私という身が、この身が問題になったということ。この私一人は、体験や経験や教養をもってしても解くことのできない、そういう大きな問いを抱えながら今もここに身を置いている。その身を私達はどういう風に頂いているか。

これも蓮如上人はこういう言葉で言われます。三帖目四通です。「人間のあだなる体を案ずるに、生あるものはかならず死に帰し、さかんなるものはついにおとろうるならいなり」。「人間のあだなる体」、具体的な姿を見れば、生まれて来たならば必ず死を迎える。「盛んなるものはついに衰うるならいなり」、現代で言えば一企業ですね、盛んに経済成長し色んなことをしたけれど、不祥事が発覚したならば衰ふるならいなり。具体的な名前を出して良いもの分からないですけれど、今社会的に話題になっているビックモーター。大きな自動車の販売店を設けましたが、お預かりした車を傷付けて請求して保険代理店から騙し取っていた。世の中、移ろいでいくということです。

私もそうです。私も移ろいでいきます。私事になりますけれど、６７歳を迎えます。２年前６５歳になった時に白山市役所から高齢者の通知が来ました。その時なぜ私にこんなものが来るのかと思いました。ウソだろうと。身は６５歳を回っているが気持ちはまだ３０代です。でも身体は正直です。誤魔化せません。「衰ふるならい」、世は移ろいでいく、その移ろいの中で私達は何をしているのかというと、蓮如上人は言います。「いたずらにあかし、いたずらにくらして、年月をおくるばかりなり」（三帖目四通）。先程の四帖目四通、「昨日もすぎ今日もすぐ」、昨日という日も過ぎ、今日という日ももう過ぎて行きます。一日が早く終わっていきます。一日どころか一週間もあっという間、一ヵ月も光陰矢の如し、あっという間に過ぎて行きます。今日は十月十七日です。今年ももう残すところどれだけあるのでしょうか。二ヶ月半ほどしかない。その間、誰もが一生懸命に生きたことは間違いありません。「いたずらにあかし、いたずらにくらして、年月をおくるばかりなり。これまことになげきてもなおかなしむべし。このゆえに、上は大聖世尊よりはじめて、下は悪逆の提婆にいたるまで、のがれがたきは無常なり」（三帖目四通）。

これも「白骨の御文」の中に出てきますね。「すでに無常の風きたりぬれば、すなわちふたつのまなこたちまちにとじ、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて、桃李のよそおいをうしないぬるときは、六親眷属あつまりてなげきかなしめども・・・」と。「無常の風」、当たり前と思っている私でも、いつ無常の風が吹くか分からない。

親鸞聖人から数えて三代目、お孫さんにあたる覚如上人の『執持鈔』の中でこう言われました。「死の縁、無量なり」。私達が亡くなっていく縁は無量にあるということです。決まったものは一つもないということです。私達は「死の縁、無量な

り」ですから一人一人違うわけです。一人一人がどういう縁で亡くなっていくか、この縁は計り知れないほどあるというのです。現代でいうならば自然災害があり、交通事故があり、様々な事件があり、そして夏の熱中症、新型コロナウイルスで亡くなっていく方もいまだに絶えません。誰一人決まったものはないということです。「死の縁、無量なり」、そういう身だということです。そういう身をここにいただいているということです。

だからこそ先輩達はそういう私の在り様をみて、危うさを感じるから「お念仏を申しましょう」とおっしゃる。お念仏を申して何かなるのではなくて、そのお念仏の呼び声で自分というものが初めて教えられる。当たり前と思っていた生活の在り様の中で、自分はこういうことを求めて歩いていたのだと。ここに人として生まれてお命を頂いて生きております。そのお命に対して応え得るような人生を歩んできたのでしょうか。そういうことを改めて一度真摯に訪ねなさい、こういわれているのだと思います。

１８００年代にアメリカで『トムソーヤの冒険』という小説を書かれたマーク・トウェインという方がいました。未来に生きている私達にこういう言葉をかけてくれました。「人生には大事な日が二日あります」と。私達が人として生まれ、生きている中で大事な日が二日あるという。さぁ、どういう日でしょうか。一日目は人として生まれてきた誕生日という日。これは大事な日です。これは仏教と共通しますね。アメリカの人も人と生まれてきた日が大事な日だと。人としての誕生は大事やということです。では残りの一日は何でしょうか。マーク・トウェインは言いました。「一日目は誕生日、二日目は私が人として生まれ、生きているということが分かった日」と。この言葉を頂いた時、驚きました。今まで私はそういう日だということを思ってもいないし、そういうことを考えたこともなかった。そして考えたことがなかっただけではなく、自分が分からない難しいことは考えないようにしようとしてきた。難しいことを言われても困りますから思考停止。経済至上主義、損か得、善か悪かという中で私達は生きていますから考えることは嫌だと。

逆に何をするかというと、「今だけ」、「お金だけ」、「自分だけ」。これを求めているのは私達です。「今だけ」とはいつか亡くなっていくのだから今だけ愉快に過ごしていこう、刹那に生きていこう。どうせ死んでしまうのだから、「今だけ」。そしてその「今だけ」を楽しむ為に必要なものは何か、「お金だけ」。お金が無ければ何もできない。そこに執着します。そして一番の執着は「自分だけ」。自分の関心事には興味を持つが、自分と関わりのないことにはあまり関わりを持ちたくない。自己中心的。こういう自我の中で生きていると、教えは必要となるのでしょうか。宗祖親鸞聖人の教えや仏教という教えは必要かというと必要ではないのです。本当に今、教えというものが必要でない方向にどんどん行って、教えはなくても生きていける。

でも人は自分だけで生きているのではありません。人と人との関わり、間柄の中で教えられ、そして生きています。だから改めて私達に「お念仏を申せ」と、申せというのは声が、言葉が聞こえてくるということ。聞こえてくるのです。これも蓮如上人のお言葉で返しますと、このお言葉になります。一帖目十一通、冒頭です。「それおもんみれば、人間はただ電光朝露の、ゆめまぼろしのあひだのたのしみぞかし。たといまた栄花栄耀にふけりて、おもうさまのことなりというとも、それはただ五十年乃至百年のうちのことなり」。私達の一生です。「電光朝露」、先

程自分のことを言いましたけれど、あっという間に私ももう六十七です。気が付けば、あっという間。昨日、報道にもあったように私も好きだったアリスの谷村新司さん、七十四歳でその生涯を終えられた。どの人もこの人もその生涯をあっという間に終えていく。電光朝露です。その間、何をやってきたのか。色んなことをやってまいりました。やってきたけれど、ほとんど覚えておりません。夢、幻です。

だから蓮如上人は「白骨の御文」で言いますね。「それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。されば、いまだ万歳の人身を受けたりという事をきかず。一生すぎやすし。いまにいたりてたれか百年の形体をたもつべきや」。確かに今、日本では百歳を超える方が年々増え続けています。それは喜ばしいことです。私達はそれを目標として若さと健康と長寿を願いながら日々生活をしているということは間違いない。しかし一番大事なことは何でしょうか。人身を受けたことの意味、この身を受けたということはどういうことなのか。

お預かりしているご門徒さんにお腹が大きくなっているお母さんがいます。コーヒーを飲みながらお話をしていました。その二十代後半の女性がこういうことを言われました。ご自分のお腹に手をそっと押さえられて「ようやく待ちに待ったお命を授かりました」と。久しぶりにこういうお言葉を聞きました。このお言葉を使うということは背景があるのです。ご実家のご両親に子を授かったということを告げに行った。そしたらその家には大おばあちゃんがいた。大おばあちゃんが孫娘に言ったのでしょう。あなた、ようやく授かりましたか、と。ここで言葉を覚えるのでしょう。

言葉というものは誰かが使って伝えないと伝わりません。突然その言葉を本人が話すわけではない。聞き覚えがあるからなのです。身近な方がその言葉を使ってくれた。ここが出発点です。

授かったお命なのです。授かりもののお命を今も生きているのです。身体が生きているのではないのです。お命が今、生きているのです。身体は借り物です。授かったお命を今だれもが死ぬまで生きるのです。授かったお命を死ぬまで生きるのが私達のお仕事です。そのお仕事の中で宿題があるわけです。それはマーク・トウェインが言ったように、人として生まれて、生きているということを確かめていく。私達一人一人宿題を与えられているのです。ただ生まれて時間の経過があって死ぬ訳ではなくて、一人の人間として生まれてきた尊さの中でこのことを確かめていく。つまり今、皆さんも私も求道の歩みをしているということです。求道の歩みを続けているということです。そして歩むのは人ですから、私達一人一人は道を求めている人だということです。だから本堂に来るのです。道を求めているからです。

これを宗祖親鸞聖人は『歎異抄』の第二章で関東のご門徒さんが京都まで来られた、その時の言葉をこういう風に綴られました。「おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして・・・」、命です、命がけということです。ここに聞きたいことがあるのでしょうと、つまり私達もそうなのです。聞きたいことがあるからなのです。先程の明日還暦を迎える方は聞きたいことがあったのです。今まで気づかなかったけれど、二人の尊い友人の死を通して初めて不安と恐れという自分では解決できない大きな問題。どうしたらいいのでしょうかと。自分の中に大きな問題がある。その問題を抱えながらお話を聞き、誰

もが不安と恐れの中を生き切っていく。そういう力ある言葉を、勇気ある言葉を、親鸞聖人は常に語られたのではないでしょうか。その言葉によって私達はお念仏を申して、ああそうかと、自分のというものに出あっていける。

人に出あうこと、聞くこと、語ること、考えることを通して、自分が生まれてきたということを、生きるということを確かめていく。そこに聞こえてくる声があった。初めて人生で自分が問題になりました、ということでしょう。今までは生きていても気が付かなった。初めて自分の中に覆い隠すことができない問題を知った。

お預かりしているご門徒の86歳のおじいちゃん、その方は日常生活の中で、大事なことをされています。それは朝の御勤めと夕方の御勤めです。正信偈の御勤めです。そのおじいちゃんにお尋ねしました。「じいちゃん、どうして朝晩の御勤めしているのですか」と。最初は自分の亡くなった祖父母がそうしていたから見よう見まねでそうしていた。ところが歳をとっていくと、こういう風に心境が変わってきました、それはあなたも一緒ですよ、と。夜布団に入って眠って、朝目が覚める保証がどこにあるのですか。朝目覚めて、そして夜寝るまで生きている保証はどこにあるのですか。だから朝の正信偈の御勤め、親鸞聖人のお言葉を聞く最後の機会かもしれない。無事に一日を終えて正信偈の親鸞聖人のお言葉を聞き、次の朝、目が覚めなくてもそれでよし。自分への覚悟ですと。こういう生き様です。

一回一回がもう喜びなのです。教えの言葉に出あう、これで良しということです。次の夕方に出あえる保証はないから、もう朝の御勤めが宗祖親鸞聖人のお言葉に出あう最後の時間。一日無事に終えたら、次の朝目覚める保証はないからまた夕方に最後の言葉に出あう。そういう覚悟です。そういうことをやっているだけですと、こういうことを教えて頂きました。自分がお命を頂いているという事実に立って、そして言葉に出あう。そして我が身というものに出あっていける。なにかそういう生き様を一人の方が教えて下さっています。

今、私達は経済至上主義の中で自我がどんどん大きくなっていって人間の関係が希薄になっている中で、改めて人と人とのつながりの中を生きるということはどういうことなのか、その手がかりになるのがこのおじいさんの生き方ではないでしょうか。そういう生き方をする方が現に目の前におられるのです。一方で、「今だけ」、「お金だけ」、「自分だけ」で生きている。何かここに親鸞聖人、蓮如上人のお言葉からいうと、何かもったいない生き方を私達はしている。ただ生きるだけで良いのでしょうか。ただ生きているだけで良いのでしょうか。改めて生きるということを真摯に丁寧に訪ねていく歩み、そのことが今、私達に求め続けられている、その時間と場所がここでないでしょうか。

**《編集後記》**

◇本文は令和五年十月十七日、浄光寺「報恩講」大逮夜の法話録であります。洵（まこと）に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

＊行事のご案内＊

「おてらくご」
五月十一日（日）・午後四時
法話・浄光寺住職
落語・笑福亭瓶二

「きこまいけ」
毎月二十八日午後二時
一緒に『正信偈』を学びましょう
お気軽にご参加ください